



グローバル化する社会で活躍するためには…

校 長 清水 一司

立冬を過ぎた頃から、朝晩が冷え込むようになりました。先日、冷えた体を熱めの風呂で温めている時、子どもの頃に「掛け算九九が全部言えるまで風呂から出ではダメですよ。」と母親に言われたことを思い出しました。幼かった私は熱い風呂から早く出たい一心で、九九を唱えたものです。おかげで日常の計算で困ることが無く母親には感謝しています。

さて、「2030年に日本国内で40～80万人規模のIT人材が不足する。」とした経済産業省の推計があります。2030年は今の中学生が社会に出る頃ですから、IT関連の求人に期待できそうです。ところが、9月25日のNHKニュースで「インド理工系名門大学で日本企業の就職説明会」とありました。「インドでも最難関の理工系の名門大学が、IT人材などが不足している日本企業から大きな注目を集めている。」と報道しています。ITを勉強している学生は日本にも多いはずですが、どうしてインドに注目しているのでしょうか。

インド出身のIT人材が世界で注目されるようになったのは20年ほど前のことです。「GAF A (Google Apple Facebook Amazon. com)」と呼ばれる巨大IT企業をインド出身のIT人材が支えていました。それで日本企業もインドのIT人材を求めているようです。

ところで、インドの学生は世界中の企業が採用したがるほどのITに関する力をどうやって身に付けたのでしょうか。彼らが子どものころからパソコンが身近にあり、ITに関する先進的な教育を受けてきたのでしょうか。このことについて、お茶の水女子大学名誉教授の藤原正彦氏は、著書「国家の品格」の中で「当時のインドは餓死する子どもが多く、パソコンどころの騒ぎではなかった。小学生はノートが買えないため、小さな石板を抱えて読み書きを習っていた。」と述べています。とてもITを勉強するような環境ではなかったようです。さらに藤原氏は「インドの小学校では、掛け算を19×19まで暗唱させている。インドの中学校、高等学校で教えている数学も、日本の学校より1、2年早く勉強している。インドは、基礎基本の勉強をしっかりとやっているからこそ、優秀なIT人材がたくさん出る。」と続けています。私が熱い風呂に苦しみながら掛け算九九を唱えている間に、インドの子どもたちは驚くことに19×19まで暗唱していたのです。

グローバル化の進展と言われて久しくなります。子どもたちが生きていく未来は、世界中の人を相手に仕事を奪い合う時代になるでしょう。グローバル化した社会にはこうした厳しい一面もあります。このような世界になっても、子どもたちが個性を發揮し活躍するために、基礎的・基本的な学力は欠かせないのです。子どもたちには、日々の授業を大切にして、基礎的・基本的な学力を確実に身に付けてもらいたいと願っています。